企業だより

Feed をはじめの一步として、畜・水産業界の持続的発展に貢献し食の未来を創造する

フィード・ワン株式会社
飼料事業本部水産飼料部
FEED ONE CO., LTD

FEED BUSINESS UNIT, AQUATIC FEED DIVISION
2-2-1, Sumiyoshi, Hakata-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka, Japan

1. 成り立ち

フィード・ワン株式会社は2015年10月1日に、日本配合飼料株式会社と協同飼料株式会社および両社の合併に先立って2014年10月に設立されたフィード・ワンホールディングス株式会社の3社が合併して誕生した新しい飼料会社です。水産用飼料は勿論のこと、肉豚、採卵鶏、ブロイラー、乳牛、肉牛などの畜産動物用飼料、実験動物用飼料やペットフードさらに養蜂用飼料など多種多様な飼料の製造販売を行っています。

水産用飼料の生産数量は年間約9万トン、畜産用飼料は年間約330万トンで、これらはそれぞれ国内の商系メーカーとしてはいずれも1位2位を争う数量となっています。

2. 水産飼料部のご紹介

水産飼料部は主に水産飼料の販売を行う営業支店と水産飼料の研究開発を行う水産研究室から成り立っています。営業支店は北海道から沖縄まで日本全国をカバーしており、主な営業拠点は横浜、知多、高松、宇和島、博多および鹿児島にあり、総勢およそ25名の営業マンが、より良い飼料をお客様にお届けすべく日夜奔走しています。

水産研究室は主に海産魚類用飼料の研究開発を行う水産開発センター（愛媛県南宇和郡愛南町）と飼料の形状や物性に関わる研究開発を行う加工開発センター（愛知県知多市北浜町）及び外部機関への委託試験や全体の統括を行う研究室本部（博多）の3ヶ所で業務を行っています。

水産開発センターは現在8名が業務に就いています。愛媛県愛南町脇本に陸上飼育を行う事が出来る施設が有る他、近隣の海面に飼育試験用の生簀を設置して、ハマチ、タイおよびカンパチなどを用いて、種々の原料の力価試験や様々な配合率の評価試験などを実施しています。

加工開発センターは愛知県知多市にある弊社知多工場内に併設されています。社員数は4名で、小規模ながら2軸エクストルーダーやペレットミルなどの各種造粒機を備え、様々な飼料の物性試験や開発試験を行って

います。水産用飼料は畜産用飼料と異なり、魚に飼料を食べてもらうためには必ず何らかの形に成形しなければなりません。そのため、稚魚用の小さいものは1ミリ以下から大きいものではブリ用の20ミリまで、配合組成も大きさも様々な飼料を製造する必要があります。加工開発センターは飼料工場のスモールプラントとして、例えば新たな原料の特性を実際の製造に近い形で試験することが出来る他、自社で行う飼育試験用飼料のほとんどをここで製造する事が出来ます。

3. 海外事業

フィード・ワン株式会社で現在、最も力を入れている事業のひとつに海外事業があります。ここでは水産関係の海外事業についてご紹介します。

① インドネシア養殖事業

本事業はインドネシアで養殖事業を行っているP.T.LUCKY SAMUDRA PRATAMA社に日東製網株式会社様とともに熱帯地域の魚の養殖技術及び配合飼料の開発を目的として、同社に飼育試験や生産物販売を委託し、インドネシアの首都ジャカルタ沖の離島にある同社の養殖施設で飼育試験等を行っています。

本事業の目的はバラムンディやハタ類の養殖モデルを確立し、東南アジア諸国へこれらの養殖技術を普及し、配合飼料販売に繋げていく事です。バラムンディは日本ではなじみがありませんが、アカメに近い種類の魚で、汽水域で生息するため、淡水でも海水でも養殖する事が出来ます。バラムンディ養殖の多くは飼育が容易な淡水または汽水で行われていますが、弊社では飼育が難しいものの、泥臭さが無く肉質に優れた海面飼育にこだわって事業を進めています。

② インド事業

意外と知られていませんが、インドは養殖生産量が中国に次ぐ世界第2位の水産大国で、水産物の需要は今後もさらに拡大することが予想されています。しかし、

インドネシアの養殖施設

Nippai Shalimar Feeds Pvt.Ltd. (NSF)

その養殖形態は粗放的なスタイルが一般的であり、良質な配合飼料が普及する事により、生産効率は大きく改善し、市場規模は一層拡大すると考えられます。そこで当社は、インドで養鶏飼料を製造販売している Shalimar Pellet Feeds Limited を事業パートナーとして、2013 年に合弁会社「Nippai Shalimar Feeds Pvt.Ltd. (以下、NSF と略)」を設立し、合わせてエビ（バナメイ、ブラックタイガー）と淡水魚（主にインド鯉）用飼料を製造する工場を West Bengal 州の Kharagpur に建設し、2016 年より飼料の製造・販売を開始しました。

インドにおける養殖産業は大きく分けて淡水魚とエビ類の養殖が盛んです。淡水魚はインド鯉（Indian Major Carps = Catra, Miguel, Rohu の 3 種類）を中心として、その他の魚を混用する粗放的な養殖形態が主流であることから、NSF では現地の需要に合った飼料を提供すると共に、合わせて養殖方法の指導も行ない、生産効率の改善に貢献していく予定です。一方、エビ類はインド国内需要よりも海外に向けた輸出商材としての地位が確立されていることから、中小の養殖業者も多いなかで、大規模なインテグレーターが力を持っている事も特徴的です。当部は NSF 出向者や現地業務を管轄する海外事業室と連携し、現地原料の有効利用やより低コストで飼料効率に優れた飼料の開発に取り組んでいます。

4. クロマグロ養殖事業

クロマグロの養殖に用いる種苗は多くを天然ヨコワに頼っていましたが、クロマグロが絶滅危惧種に指定されるなど資源保護の機運が高まり、現在では天然種苗を用いる新たな養殖生簀の設置は禁止となっており、さらに養殖生産量を増やすためには人工種苗を導入する他ない状況となっています。

そのような状況に対応すべく当社は、2011 年に株式会社極洋様と愛媛県愛南町に人工種苗クロマグロの養殖を行う「極洋フィードワンマリン株式会社（以下 KFM と略）」を設立しました。種苗生産は旧日本配合飼料時

KFM 漁場の一部

代から蓄積した資産、技術力を背景として子会社の南洋漁業㈱に行っています。2014 年には人工ヨコワを育成した親魚より得られた稚魚を沖出しする完全養殖に成功し、翌年以降も人工親魚を親とする稚魚の沖出しは順調に推移しており、2017 年末には完全養殖クロマグロの初出荷が実現出来る見通しです。

また、クロマグロ養殖用の各種飼料についても水産開発センターを中心として精力的に研究開発を行っています。特に仔稚魚用飼料については、本年度ある程度の目処がついた事から、出来るだけ早い時期に広く一般に販売出来る体制を構築している所です。さらに育成用飼料として、クロマグロ育成用 EP「EDEN」とモイストペレット用マッシュの「極」をそれぞれ販売しております。EP「EDEN」は使用する時期にもよりますが、生餌と比較しても遜色の無い成績が得られており、環境への負荷の大きい生餌の代替飼料として広く使用されるのも遠い話では無いかも知れません。

5. おわりに

今、国内の養殖生産量は少子高齢化や人口減少などの影響もあり、横ばいか僅かずつですが減少傾向となっています。しかし、海外に目を向けてみると養殖生産量は右肩上がり、まさに成長産業となっています。日本の養殖技術は配合飼料も含めて高いレベルにあると思いますが、その技術が海外ではストレートに通用しないのもまた事実です。その意味を国内の飼料製造販売とともに海外展開を積極的に進めて行くことによって理解し、5 年後 10 年後の配合飼料メーカーとしてのあり方を追求していきたいと考えております。

2017 年 4 月には北九州に国内では最大規模の水産飼料工場が完成する予定です。当社ではそこを起点として、配合飼料の更なる進歩と国内の養殖産業の持続的な発展のため、研究開発を初めとした総合的な取組を今後とも続けてまいります。（水産飼料部 秋元淳志）